

わが国の夏は、むし暑くて、読書に向いた季節とはいえません。といっても、私共教職にあるものは、明日の計画に追われないうで、自分の時間が得られる期間です。朝夕の涼しいときや、緑陰を選んで、本業に直接関係のない本を読み、豊かに暮らしたいと思えます。次に、いくつかの本をあげますが、それも参考までで、何でもお好みの本を読まれることをおすすめします。

米食肉食の文明

●筑波常治著

●NHKブックス

筑波さんは、東北大の農学部出身の科学

評論家です。この本は、農学の立場をふま

えて、日本人と稲作との深い関係を、西歐人の牧畜の関係と比較して論じてあります。しかし、決して固い専門の本ではありません。日本人の考え方や、生活のしかた（家庭内でなせ会話が少ないのかなど）などが、稲作と深いつながりのあることを、やさしく解説しています。科学が日本で定着しにくいこともふれられています。軽い気持ちで、読み進む間に、はっと思いついたることが多くて、改めて「日本人」について考え直すようになると思います。文章も上手で、読み易い本です。

アメリカの小さな町から

●加藤秀俊著

●朝日選書

アメリカという国は、いろいろな面から紹介されています。しかし、この本ほど、ふつうのアメリカ人の生活が描かれている本は、少ないのではないのでしょうか。著者の加藤さんが、アイオワ州のスプリングフィールドという市で、家族とともに一年間を過ごした記録です。私たちが、新聞で知らされたり、駆け足の旅で目にしたアメリカと、この本に出てくるアメリカ人の生活とが、違うことに驚ろかされると思います。アメリカの庶民の生活や考え方がわかります。加藤さんは、現在学習院大学の社会学の教授ですが、評論家として広い分野で活躍している人です。筑波さんと同じように、文章は洗練されています。なお、この本が面白かったら、同じ著者の『イギリスの小さな町から』（朝日選書）も読んでみるよよいでしょう。

## 猿

## 人

●江原昭善著  
渡辺直経

●中公自然選書

今度は、少し固いものをあげましょう。

一体、人間はいつ、どこで誕生したのか、現在大きな問題になっています。新聞でも、しばしば紹介されていますから、お気づきの方もあると思います。

この本は、私たち人類の祖先はなんであったのかを、アフリカなどで発掘されている化石をもとにして、案内してくれます。

化石や人類学の本は、退屈なものが多いですが、この本は違います。発掘に当たる人々のいきいきした姿も紹介されていますし、何よりも著者の考え方が、大胆に述べ

られています。

江原さんも、渡辺さんも、人類学者ですが、決して化石屋さんではなく、文化や人間の生活に興味とするどい目を向けている人たちです。余り細かいところは気にしないで、ちょっと努力して全体を読むと、人間に対する新しい見方が身につくと思います。

## 人間—その誕生から死まで—

●朝日新聞科学部編

●朝日新聞社

現代の医学と生物学の進歩は、たいへんなもので、十年前に定説であったことが誤っていたり、逆に十年前にもの笑いにされていた考えが、考え直されたりしていま

す。

この本は、一九七五年に一年間、生命研究の第一線を紹介した新聞記事をまとめたものです。新聞記者が、程度の高い知識を、やさしく解説しています。誕生から成長、病気、食べることの意味、老化とは何かなど、私たちが知っていてよいことが、たくさん盛り込まれています。

科学ぎらいの人でも、自分のことと考える読んでいただくと、生命とは何かについて興味がわくと思います。

